# 人と人とがつながりささえあう

# 地域づくりに向けた居場所の可能性





公益財団法人かながわ生き活き市民基金

#### 目 次

### ◆基調講演

共に生き	きる場の再創造 〜活動	かの現場からの提言へ	,		
	加藤彰彦さん(沖縄大	学名誉教授)		•••••1	
◆福祉たすり	<b>すあい基金助成団体に</b> 。	よる居場所活動実践	報告		
報告 1	人々の出会い、つながりを -特定非営利活動法人み		(横須賀市)—:	木下 青子さん・・・・・1 4	ŀ
報告 2	生協・子育て活動団体・乳ーひだまりの家プロジェクト			・ 長瀬 未紗さん・・1 8	3
報告3	誰もがほっとできる多世代: ーら・ぱれっと(茅ヶ崎市)		<u> </u>	重田 扶美子さん・・・・2)	2
<b>◆パネルディ</b>	スカッションより				

#### 講師紹介

教育学者、評論家、ノンフィクション作家、前沖縄大学学長、同大学名誉教授、沖縄子ども研究会会員 1964 年横浜国立大学教育学部教育学科卒業。大学卒業後、横浜市内の小学校教員を経て、日本列島を 4年余り放浪し共同体巡りをする。

1972年から横浜市役所、横浜児童相談所のソーシャルワーカーを19年間務める。

横浜市立大学文理学部助教授を経て、1991年教授。1995年より同大学国際文化学部教授、社会福祉論 を担当した。

2002年沖縄大学教授、2010年~2014年同大学学長を務めた。

共に生きる場の再創造をめざしてまとめにかえて - 加藤彰彦さん-

主な著書に「まちに暮らしの種子を蒔く―今この時代を生き抜くために」「<繋がるカ>の手渡し方:離陸の思想、着地の思想」「沖縄・戦後子ども生活史」「生きること、それが僕の仕事―沖縄・くらしのノート」

# 共に生きる場の再創造

#### ~活動の現場からの提言~

沖縄大学名誉教授

加藤 彰彦さん

# 1. 生きてきた現場を振り返る

僕は沖縄から戻ってきて地域活動をやっています。 老人会をやってくれないかなということで老人クラブ に入って3年近く経ちました。今日お配りしたのはそ の会報、毎月出しているので、ご覧ください。

今日お話しする「共に生きる場」、僕は若い時からみんなが

安心して生きられる場所、コミューンや共同体を探して日本中まわって歩いたんですね。いろいろ探してすばらしいなと思って行くんですが、そこに暮らしているとだんだんとその中に、いろいろ問題とか矛盾が見えてくる。だから完璧な理想の場所というのはなさそうだなと気づいたんです。だから今日のテーマである「共に生きる場」、現場というのは自分が今住んでいる場所、生きている場所、働いている場所であって、そこを日々、みんなでどうやって生きていくか模索しながら安心して生きていく場所に変えていく、そのことが僕の実践だと思ったんですね。

沖縄から横浜に戻ってきたときに、「今の僕の現場ってどこだろう?」と考えたときに、「地域だ!」と思ったんですね。地域とは顔がつながっている人たち。僕の住んでいる小さな田谷町というところは人口が2000人弱、500世帯。昔も住んでいたので、知っている方も多いんですね。ここを現場にしたいと思って、今、老人クラブを中心として生きている、考えているところです。現在は地域が現場ということに達したんですが、では、今まではどんなところを現場にしてきたかということを振り返りながら、この後の3団体の報告と重ねていこうと思います。3つの団体のみなさんのお話が聞けて交流ができるというので楽しみにしています。よろしくお願いいたします。

# 2. 横浜の現場から -寿町・児童相談所・横浜市大―

僕の生きてきた横浜の現場を振り返って大きく分けると1つは横浜の寿町。ここは東京の山谷、大阪の釜ヶ崎と並んで三大ドヤ街といわれまして、職場や家族や地域を失った人たちが、どこにも行き場がなくて集まってきている。そこには簡易宿泊所といわれるドヤというのがあって、そこに泊まって日雇いの仕事に出ていく(当時は仕事がまだいっぱいあったので)、そこで生きていく、そういう場所です。その寿町での体験。2つ目は児童相談所。その街で子どもたちが日雇いの労働者を殺傷してしまうという事件があって、子どもたちのことをやりたいというのがあって児童相談所に行ったんですが、その児童相談所が僕のもう1つの体験です。3つ目はその後、思いもかけず横浜市立大学に行かせていただくことになった時に、横浜市金沢区が中心ですが、地域でいろいろ取り組んだ体験を振り返ってみようと思います。

#### 寿町の現場から

#### 子どもの場づくり

当時(1970年代)寿町には 8,000人くらいの日雇い労働者が住んでいたんですが、釜ヶ崎や山谷と違って、ここには女性の働くところもたくさんあったので、女性も住んでいました。それで子どもたちがかなり、300人くらいの子どもたちがいたんですね。ところがその子どもたちが学校に行っていない。つまり大人が夜遅くまで酒場にいたりするので、子どもたちも遅くまで起きている。だから朝起きられない。それで学校に行かない。そういうわけで不登校の子どもたちがいっぱいいました。先生が呼びに来ても、「そんなところに行く必要ない」「日雇いの親父と同じようにやるんだから、学校なんか行かない」と言われちゃう。それで横浜市では、子どもたちの対策をしたいということで職員を募集していました。放浪後30歳の時でしたが、寿町の現場に入ったんです。僕は小学校の教員をしていたので、子どもたちの担当をしてほしいと言われたんですね。

そこでまず、子どもたちを集めようと、寿生活館の2階を子どもたちに開放してもらいました。チラシを作って配るんですが、誰も来ないんです。卓球台も入れて、お菓子食べたり本読んだりしようと呼ぶんですが誰も来ない。覗きには来る子はいるんだけど、僕が立ってるとちらっと見て入って来ない。ここではだれが主人公かな?と考えてみると、子どもなんですね。そこで子どもたちの意見を聞こうと思い、公園にお菓子をもって行きました。「生活館にせっかく部屋が空いているので、みんなで集まって何かやりたいと思うけど、来ない?」って誘うと、「いやだ!」と言うんです。「何で?」と聞いたら「だって大人がいるんでしょ?先生みたいな人が来るんでしょ?」大人が来てやらされる、自分たちが中心になれないということなんでしょうね。そこで、「どういうところだったら来てくれる?」と聞くと、「子どもたちだけの場所だったらいい」と言うんです。「でもそれだと何かあったときに

困るから、誰か大人を置きたいんだけど、どんな人だったらいい?」と聞くと「女の人」「若 い人」だと言うんです。

これは女子大生だ! と思って、近隣の女子大を回って子どもたちのためのボランティアを募ると 12, 13 人の女子大生が来てくれました。子どもたちに「女子大生が来てるよ」と声を掛けたら、はじめ 3 人くらいの女の子が来ました。「子どもたちが自由にできる」ということと、おなかをすかせているので、「食べるものをつくって食べたい」という注文が出てきました。何かするときには、そこにいる人たちが主人公ですから、その人たちが何がし

たいかということを知っていないとちゃんと準備ができないわけです。こちらがこうしてあげたいということも良いんだけど、思いが一致しないこともある。

食べ物があって、自由があって、若いお姉さんがいるという子どもたちの条件を整えていったのですが、若い子は料理ができない。そこで今度はおばちゃんたちに「料理の



できる人、手伝ってくれないか」と呼びかけると、いろんなものを作ってくれました。料理 教室を始め、カレーライスをつくったりしていると 10 人 20 人あっという間に集まってき ました。いろんなことが始まってくると、子どもたちは自分のことに関心を持って欲しいの で、関心を持ってくれる人が来る時には必ずここに来るようになる。自分に関わってくれる 人が欲しいんです。今は非常にユニークな学童保育所になっていて、いろいろな地域から見 学に来ています。

#### 語り合う場づくり

もう一つは大人たちの場。日雇いのおじさんたちも集まって何かしたほうが良いなと思って声を掛けましたが、やはり来ないわけです。当時はみんな酒場で集って話をして、言い争ったりけんかしたりしながらも、そこではにぎやかにやっていました。ところが公式の場でみんなで集まってやろうとすると、これがまた誰も来ないんです。これはどうしたら良いかなと思って、そこで「自分のことと寿町のことを自由に語る会」というのをつくり6時半くらいから飲み物と食べ物をちょっと置いて始めました。物珍しさで来るんですが、誰かが喋りだすと大げんかになってしまう。どうなることかと思っていたら、港で働いているSさんというおじいさんが、「こんなことやってたら、いつまでたっても話が始まらない。誰かが喋ったらその人の話が終わるまでみんなは黙って聞け!さあ、誰からやるか?」と仕切ってくれてたくさん手が上がりました。その中で、さんざん騒いでいた人が前に出て話始めようとするんだけど、シーンと静まり返っている中に出るとしゃべれない。「俺は何を話すんだったかな?やっぱり今日はやめとく」みんなの前で改まって話すとなると自分のことをしゃべるしかない。それには話す内容をメモしておかないといけないとか、いろんなことがだんだんと始まりました。

話し合いはSさんが仕切ってくれて、その中で共通してみんなが知りたいことを勉強し

ようということになりました。一つはアルコールの問題。お酒を飲んで病気になる、アルコール依存症になったらどうしたらよいか、肝硬変になったらどうするかということで、保健婦さんに来てもらって勉強するんですが、これが熱心ですよね。またある時は、仕事に行ってお金がいくら出るかというテーマ。僕の友人で大学の経済学の女の先生が来てくれたのですが、「搾取されてるんじゃないか?」「搾取ってなんだ?」とみんなに突っ込まれて、うまく説明ができなくなってしまいました。1年後に彼女がもう1度来てくれた時には、いかに儲けが生まれるかという話を実に見事にしてくれました。みんなは「そういう訳か」と納得していました。

このような勉強会をする中で、明治大学をでて司法試験に受かったという日雇いのおじいちゃんがいて、そのおじいちゃんを中心に憲法の話をやろうということになりました。きっかけは「なぜ日雇いで働いていて、俺達にはいろいろなことが認められないのか、認められるためにはどうするか」ということが話題になり、だったら憲法を勉強しようということになりました。当時100円で売っていた憲法の本をみんなで買ってきて、1条から全部読みました。そのおじいちゃんが解説してくれるんですが、それが実に見事で、今でも忘れません。30人くらいで勉強し、ボランティアや役所の人も何人か来ました。ある時「この憲法というものは誰が守るべきものか、わかる者は手をあげろ!」と言うと「俺たち国民が守るべきものだ」とみんなが手を挙げたんですね。「違う、国民は監視するものだ。国会議員や役所の人間が守るべきものだ。だから、これをちゃんと守ってるかどうか監視する俺たちが憲法を知らないとダメなんだ!」と。例えば25条を勉強すると、そのあと役所に行くわけです。そして職員に「憲法は何条まである?」「25条には何が書いてある?」「じゃあ、26条は何が書いてある?」「それは教育の話だ」とやる中で、だんだん元気になって語り合いの居場所が出来上がっていくわけです。

勉強会で一番人気が出たのが「私の自叙伝」です。初回はこのまちに住んでいたあるおじいちゃんが、戦争に行ってみんな仲間が死んでいった話をしたのですが、その時に集まっていた人がみんな涙を流しました。自分の同僚が目の前で亡くなって遺体の処理をしたことや、弾が当たって自分の手を取って「母ちゃん、母ちゃん」と言って死んでいったという話にみんなが泣いて、そしてそれぞれに仕事に出かけていきました。語り合う中でお互いがどんな人なのかということがわかってくると親しくなってきて、このまちにサークルがどんどんできてくる。俳句のサークル、障がい者のサークルなど 20 以上のサークルができて、まちに住民懇談会というのができてくるんです。寿町での体験から、地域というのはそこに住んでいる人が集っていろんな課題を出していくと、解決していく方法が出てくると思ったのです。

#### 児童相談所の現場から

児童相談所に移った当時(1981年)、横浜のまちで日雇いのおじさんたちが少年たちに殺

されてしまうという殺傷事件が起こりました。「子どもたちに現実をちゃんと伝えないといけない」「この子どもたちがこういうことに巻き込まれていくことを直したい」思いました。 児童相談所も主人公は子どもなんだけど、お母さんや学校の先生や地域の方、いろんな方が来るのですが子どもは来ないんです。自分で児童相談所に来る子どもはいないんです。「いやだ、いやだ」と言って連れてこられるんです。カウンセリングを受けても、何か言いたくて来たわけでもないのに言えるわけがない。これは個室の中で相談を受けているのが問題だということで、今では当たり前になりましたが、アウトリーチといって子どもたちがいる場所、一番元気でいるような場所、子どもたちがたむろしている神社の裏とか、今で言えば

コンビニとか、僕はそういうところに連れてってもらって、食べ物を買っていってみんなでおしゃべりしました。子どもたちが住んでいるところへの家庭訪問はみんな嫌がるけど、家庭に行くと家の中の環境が非常によくわかる。どこに住んでいるか、どんな環境にいるか、子どものことだと思って家を訪ねてみると、おじいちゃん、おばあちゃんが病気でいるとか、精神疾



患のある方がいるとか、子どもだけの問題ではなくて、家庭そのものの問題があって、いろんな状況があるということがわかりました。これは家庭を変えないと子どもだけ変えるのは無理だというので、そういう意味で言うと、子どもたちが住んでいるその場所そのものを変えないといけない。最初はそれが家庭と思っていたのですが、実はほとんどの家庭が孤立していたんです。家庭が孤立しているとなると、「地域そのものを変えていかないと、子どもの問題は解決しない」というのが僕の結論でした。

児童相談所時代には毎年子どもたちとキャンプに行っていました。子どもたちをキャンプに連れていくと、最初はみんなばらばらで知らない同士の子供たちが、3 泊 4 泊一緒に過ごす中で、見事に変わるというのを目の当たりにしました。一緒になってみんなでやるとこんなに変わるのかという体験がいっぱいあります。たくさんのエピソードがあるのですが、その中で一人自殺未遂を何度も繰り返す女の子がいました。その子をキャンプに連れていくのはみんなが反対したのですが、どうしても連れて行ってあげたいと思いました。自分の恋人がバイク事故で死んでしまって、ずっと「私も死にたい」と言っていて心配だったんです。みんなで山登りに出かける時に「行きたくない」というので、その子を残してみんなで出かけました。もう一人熱を出して行けなくなった女の子がいて、山登りから戻ってくるとその子が病気の子を看病していたんです。山登りから帰ってきて子どもたちは水着で水浴びを始めました。その子は水着を持ってきていない。ところが病気になった女の子がその子に「私の水着使っていいよ」と貸してあげるんですね。その水着を着てみんなの輪の中に入って行くんですね。

3日目の夜のキャンプで、最後に僕がみんなの前で話を始めた時、例の女の子が「私喋り

たい」と言い出したのでマイクを渡しました。「私、こんなところなんかに来たくなかったけど、みんなと一緒になんかいやだと思っていたけど、今まで死にたいと思っていたけど、でも生きるよ!」びっくりしました。「ありがとう!みんな、ありがとう!」 みんながその子の周りに集まってきて肩を組んで「良かったな、良かったな」と言っている。彼女は変わったんです。こういうことがキャンプの中でいくつもありました。子どもたちは集団の中で、仲間の中で変わっていく、これがキャンプでの実感です。

#### 横浜市大の現場で

1991 年から横浜市大でお世話になりましたが、市大のある金沢区で精神障がいの方たちが病院から戻ってきていくところがないので作業所をつくろうという動きがありました。ところが作業所がなかなか見つからない。「精神障がい者の~」と言うと断られ、20回も30回も訪問してもできませんでした。たまたまあるお店が閉鎖するというのでそこを訪ねていくと、お店のご主人がご自身のお子さんが精神障害で苦しんでいました。「そういうことであればお貸しします」と貸していただいて、今は精神障がい者の作業所になっています。当事者の方との思いが一致する、同じ苦しみを持っている人同士がつながっていくということがその時よくわかりました。

不登校の子どもたちのための居場所づくりは、不登校児についての連続講座がきっかけとなり、自主的な学習会「金沢虹の会」が作られました。当初は悩んでいる母親と支援する人たちが中心でしたが、やがて子どもたちが集まれる場もつくられ、市大の学生たちに入ってもらってとても楽しい居場所ができました。しかし来るのはみんなお母さんばかりで、お父さんたちが全然出てこない。ところがその中で一人だけお父さんが来て、自分の体験を話してくれました。彼がすごく悩んでいることが分かったので、「おやじの会」を開こうということになり、僕も親父なのでお父さんだけの会に参加し、今でも30年以上も続いています。ここでは、お父さんたちが仕事と日常との間で、実はものすごく苦しんでいるということを実感する体験をしました。こんなことの繰り返しの中で、僕の中では現場、地域、暮らしている場が基で、そこにちゃんと入り込んで活動しないといけないということがわかりました。

# 3. 沖縄の現場から 一沖縄で学んだこと-

横浜市立大学で11年間やらせていただいて、2002年に沖縄に行ったとき、僕は60歳でした。体を壊していろいろ悩んでいましたが、沖縄大学から子どもたちのことをやりたいから来てくださいということでした。募集要項には50歳未満とあって、これは落ちるなと思って面接に行ったらすぐにお返事があって、当時の学長から「来い」と直接言われて行くこ

とになり14年間いました。

沖縄に行った直後に、沖縄では初めてといわれる虐待があって、自衛隊員のお父さんが子どもを殺してしまうという事件がありました。沖縄ではこのニュースが大衝撃で、なぜこのようなことが起きるのかという関心を集めていました。地域で子どもの問題に取り組む方たちが勉強を見たり食事を提供する様々なグループ活動がありましたが、あちこちに点々としていて、5年から7,8年経つとみんなくたびれてしまう。なくなってしまう。何とかお互いに勉強会をしたいと思って、その実態を学生たちと見て回りました。

#### 子どもの現状や課題の共有から広がった!

児童施設も見て回りました。びっくりしたのは施設が 20 年 30 年も前の昔の状況のままで、おおぜいの部屋で皆が雑魚寝をしているようなところまである。職員の先生も研修の機

会もなければ時間もない。疲れ切っていました。子どもたちがたいへんなことになっている、改善しなければいけないと「子ども研究会」をつくっていろんな職場や地域の方を集めて報告会を開きました。沖縄は離島も含めると長いので、あちこちでやろうと沖縄中を数年間かけてほとんど全部をまわり、報告を書いてみなさんに配ったところ、当時 50 くらいのグループがありましたが、交流がどんどん始ま



りました。それから子ども白書をつくろうということになり「沖縄子どもの貧困白書」という立派な本を2年半くらいかけてみんなで文章を書き、写真を入れて作りました。これが沖縄で飛ぶように売れました。

この活動から子どもたちの現場の悩みというのが見えてきて、これをやったらよくなるとか、このように作ればよいとか、児童館をつくったらよいという案が出てきて、これを行政に要求しましたが、なかなか当時の行政は子どもや福祉といったテーマでは動いてくれませんでした。

#### 子どもの実態調査の実現

どうしようとなった時に沖縄で選挙があって、当時の知事が辺野古への基地建設を認めてしまうということが突然起きてものすごく反発が起きていました。その前にも 1995 年に沖縄の少女が 3 人のアメリカ兵に暴行される事件があって、沖縄中が基地の問題で沸き立ったんです。基地の問題をみんなで一つになって取り組まないと解決しない、この話し合いをしている時には何度も涙が止まらなくなりました。保守も革新もなく、沖縄のことは沖縄の県民が決めることだとみんなが立ち上がったんです。当時那覇市長で自民党の翁長氏が

オール沖縄として立候補し、辺野古に基地は作らせない、沖縄を自分たちの島として取り返すんだという活動になりました。

選挙公約として、まず「平和な沖縄にするために基地はいらない」、2つ目が「みんなの生活が安定するように経済的な発展をする」、3つ目が「子どもたちが安心して暮していけるような島にしよう」と決めたんです。当時(2014年)、日本の子どもの相対的貧困率16.3%の発表や、各地域で子どもに関する調査やいろいろな活動をしてくださいと「子どもの貧困対策に関する大綱」(2014年8月)ができましたが、国はその後、何もしてくれません。しかし沖縄はこれに取り組もうと翁長氏の当選後、行政と民間と市民とが一つになって、この時に「沖縄子ども総合研究所」をつくって調査研究をはじめました。すると29.9%、約3割の子どもたちが貧困であるという状況が明らかになりました。

さらに詳しく子どもたちの生活実態を把握するため、2015年から3年間「子どもの貧困 実態調査」をやりました。1年目に小中学生、2年目に高校生、3年目に乳幼児の調査をや りました。行政も民間も市民も夜中まで一緒にやりました。この調査結果を分析し、現状や 取り組みが記述されている『沖縄子どもの貧困白書』は沖縄ではベストセラーになりました。

調査をする際に、子どもの貧困状態というのはどういう状況を指すのかということで何度も激論しました。そして最終的に、「子どもの権利条約」が守られないことが子どもの貧困状態だという結論になりました。もっと突き詰めていくと4つの権利「生きる権利」「守られる権利」「育つ権利」「参加の権利」が守られないことになりました。「子どもの生きる権利」とは、生きていくことに必要な衣食住が守られること、「子どもが守られる権利」とは、虐待されたり、辛い思い、搾取から守られるということ、「子どもが育つ権利」とは、

子どもがいろんな人と出会って体験をすること、 最後は「参加の権利」、子どもたちに関することは 子どもたちが参加して決めていく、当事者が参加 できない、発言できないというのは貧困だという ことです。この4つに結論が出た時に「貧困がわ かった」と感じました。貧困とは単にお金がない ということではなくて、このような権利が守られ ていないことが貧困ということがはっきりした ので、調査の設計や分析もきちんとできました。



#### 「生きること」の目的(意味)を学ぶ

その後は沖縄での活動を子どもの貧困問題を中心にやることになりますが、その時に初めて沖縄で生きることの意味が分かったんです。生きる目的、意味は2つしかないんです。 1つは「生きること」、どんなに辛いことがあっても生きることです。生きるためには何が必要か、沖縄では3つだけと言われています。「食べること」「住むところ」「仲間がいるこ と」これはストンと落ちた。僕は人間が生きている、自立する条件ということは、この3つさえあればどんなことがあっても生きていけるということを教わりました。もしも生きることがつらくなったときはどうするか?沖縄の人たちは、一人ではどんなに頑張っても生きていけない。辛くなったときは必ず仲間と一緒に生きること。だから、誰かが一緒にいてくれれば絶対に人間は死なない、一人でも自分のことを考えてくれる人がいれば、信頼できる人がいれば生きていける、つまり「共に生きる」ということが生きることの本質なんだ、共に生きることがなかったら一人だけでは生きられない。「共に生きること」が生きることの目的(意味)なんだということがストンと落ちました。これで沖縄は今も頑張っています。生きる目的(意味)にはもう1つあります。辺野古に座り込んでいた時に一緒にいたおじいちゃんたちに聞いていたんです。「人間は100年経てばみんな死んでしまう。でも子どもが生まれるから人間はずっと生き続けている。子どもが生まれたら、その子どもをちゃんと育てること。これが生きる目的、私たちの目的」。子どもを産み、育てること、安心して子どもを育てられること、その子どもたちが、「とともに生きていく」ということを学んで生きていく。この2つが生きることの目的(意味)ということを沖縄で学びました

# 4. 沖縄の取り組み - 課題の共有と対策づくり-

沖縄での実態調査や分析、その研究会や報告などによって課題がはっきりして、それが共通の課題であると、みんなでそれを何とか解決しようとなる。そんな取り組みを紹介します。具体的な取り組みは先ほどお話した『沖縄子どもの貧困白書(かもがわ出版)』でいろいろ紹介されています。是非一度ご覧になってください。



#### 沖縄市の取り組み

当時、沖縄市では東門美津子さんが市長になって、子どものことをやりたいと言って、沖縄市が一番出生率が高い市なので「子どものまち条例」をつくろうと、調査をすることになり数年間やりました。子どもに関わる大人たちがどんな対応をしたら良いかということをみんなで議論しました。そこでの結論は、子どもたちに対応するときにまず「応じる」。これは子どもだけではなくお年寄りや外国人に対しても同様です。でも、応じるだけではダメです。2番目は「支える」。実際に困った人がいた時に、例えばおなかがすいた、歯が痛いという時に、今すぐ対応する、病院に連れていくというような支えが必要です。そしてもう1つが「大人たちが変わる」ことです。子ども観を変える、人間観を変える、大人が子どもを指導するとか保護するということではなくて、子どもと一緒に生きていくという価値観

に変わるということです。子どもと一緒に考えていく大人に私たちが変わらなきゃいけな いということです。

#### 子どもの居場所づくり

貧困調査が新聞でも取り上げられて 29.9%の貧 困率、ガスも水道もない家がある、そして学校にも 行けない、食事もとれない子どもたちがいるという ことで、最初に「ももやま食堂」というのが始まり ました。「食べてない子どもがいるんだったら何かし ■ももやま子ども食堂 関所式



よう、やらなきゃいけない」と学童保育をやっていた人が小さな食堂を借りて、そこで子ども食堂を始めるということがスタートするわけです。そこに集まってきた子どもたちが将棋がやりたい、オセロがやりたいなどの意見が出て一緒にやってきました。その中で計算ができない、わからないということで、勉強を教えようということになりました。「ももやま食堂」は食堂から始まりましたが、子どもたちと遊び、勉強し、今は宿泊もできる場所になりました。地域の人たちがお米を持ってきてくれたり、元学校の先生が勉強を教えに来てくれたりと変わっていきました。

子どもの居場所づくりですが、生きていくためには「食べること」、「行く場所」が大事だということがここでもはっきりしました。家には帰れないという子どもたちが住む場所をつくっていく、これも居場所づくりです。

### にじのはしファンド

「にじのはしファンド」というのは、沖縄の子どもたちの夢をサポートする給付型の奨学金のしくみです。ある女性が、知り合いの子どもを何とか進学させてあげたいとみんなに声をかけて、毎月一口1,000円ずつ出すという個人の奨学金を始めました。最初は5,6人から始まって、これがあっという間に増えて500人になりました。これで子どもたちにひと月5万円の奨学金を渡すということになりました。沖縄では5万円はたいへんなお金です。新聞に取り上げてもらったり、いろんなところで講演会をしたり、どんどん広がって今では2,000万円以上集まります。50人以上の子どもたちをサポートしています。これは個人発の支援の取り組みで、小さなことでも個人でもできるという事例です。

#### NPO 法人にじのはしファンド

団体 HP: https://nijinohashi-fund.blogspot.com/

#### 自治会での取り組み

ある自治会(浦添市陽迎橋自治会/編集者注)の会長さんが29.9%という子どもの相対的貧困率を見て、地域の300人の中学校には100人の子どもが貧困で困っていることになる。だったら自治会とは地域の人たちのための会だから、自治会の一室を開放して地域の人たちの食事から始めようと、週1回子どもたちに食事を食べさせるということが始まりました。学校の先生方にも来てもらって、これがどんどん参加が広がっていきました。これにどう対応していくかということで、町内会全体で考えようと子ども部会が立ち上がり、専門家を招いて勉強会も始まりました。この取り組みを行った浦添市では中学校区に2人ずつのコミュニティソーシャルワーカーを置きました。これもまたすごいことが始まり、今も進んでいます。

## 南風原町の居場所づくり

南風原町では、子どもの貧困・孤立の政策としては居場所を作っても 1 週間に 1 回では子どもたちが納得するかわからないということで、まず地域の実態調査を始めました。学校に行けない子が何人いる、学童保育に入れない子が何人いるという具合に全部データを出して、これを保障するために地域の中に居場所を作ろうということになり、国の補助金をうまく活用して行政主導で 2 つの居場所(名称:子ども元気 ROOM)を作りました。どちらかの施設が必ずオープンしていて 365 日休みなしです。沖縄の人たちはやろうとなったら本気になって、行政と一緒に進めることができました。

#### つながり コミュニティの再生

沖縄にはもともと共同売店というのがありまして、これは村で作ったものを売っている お店です。村の人が交代で店番をし、収入は村のために使います。お年寄りへの無料配食や 大学進学の奨学金、何か建物を建てるなど、その中で決めて実行します。近くにコンビニが

できてもそこには行かず、みんながこの共同売店を支えています。それと「もあい」という仕組みがあり、みんなでお金を出し合って、必要だと思う人にそのお金を出します(1 グループ 5 人から10 人くらいで1回5千円から1万円くらい)。こういうたすけあいがあります。僕も入っていて「もあい」でもらったお金で妻に高価なプレゼントを買って驚かれました!



沖縄の共同店(共同売店) 奥共同店(沖縄県国頭郡国頭奥)

# 5. 田谷・地域の現場から - コミュニティ、暮らしの再創造―

#### 地域に生きる

沖縄から戻ってくるとき、実は病気になってしまいました。過労で倒れて辞めることになってしまいましたが、その時にみんなが「沖縄に一生いたらいい」と言ってくれたのが凄く嬉しかったですが、ある方からこんなお話をされました。「沖縄だけが頑張っても沖縄は変われん。日本に変わってほしい。沖縄だけが変わっても日本は変わらない、だからどんな小さな自治体でも良いから沖縄と同じように生きてほしい。自分たちが決めたことちゃんと守ってほしい。自立した自治体が沖縄以外にもどんどん生まれてこないと、沖縄が変われない。帰ったところでじっくり根をおろして、地域の中でやってみてはどうかね。遠く離れても、日本のどこか一つでもそういう灯が燈っていたら、いつか繋がってくるさ」そして僕は沖縄から戻ってくることになります。

#### 田谷長生会

「本土が変わらなければ」という思いがあって、これからは横浜に戻って活動しようと小さな田谷という町に戻ってきて老人クラブに入りました。半年くらいはみなさんとカラオ

ケをやったり旅行に行ったりしていましたが、会報をつくっていた方が亡くなったあとずっと休刊になっていたので、また発行しようと文章を書き、写真も入れて会報づくりを始めました。するとみんなが夢中になって読んでくれました。

老人クラブは 70 人以上のメンバーがいますが、お互いよく知らない。「会報に一人ひとりの紹介をしてほしい」という意見があり、最後のページに「田谷人物誌」を載せることになりました。最初は「私の人生なんて聞いてほしくない」とみんな嫌がっていましたが、たまたま町内会の会長を長くやっていた方が、足を悪くして老人クラブにも来られなくなってしまいました。その方のお見舞いに行って話していたら「町内会の会長もやって、いろいろな仕事もしてきたが、何も生きていた意味がなかった」と言うのを聞いて、この人のことを書きたいと思いました。

ご本人の了解を得てお話を伺いに再度その方を訪ねていくと、その 方は背広を着て玄関に座っていました。セピア色の写真を見ながら半 日話を聞き、何度も泣きました。その中で戦争の時のつらい思いをいっ ぱい語り、もう戦争は起こってはいけないとの思いから、中国と朝鮮に ついて学ぼうと中国語と韓国語の勉強をしていたそうです。そのお話を



田谷長生会会報「笑顔・楽しく」

掲載したら、よく顔を合わせて知っている老人クラブのみなさんもびっくりしていました。 その後は90歳を超えた方たちから「俺の人生を書いてくれ」と次々と手が挙がってきて29 人目まで来ました。僕一人だけがみなさんのお話を聞いていてはいけないと思い、一人ひと りが講師になって地域の方々と学び、語り合う「シニア大学」を始めました。第一回は94 歳のおじいちゃんの話を聞きました。本当に涙、涙の話です。このような場を通して一人ひ とりが元気になってきます。

### 地域の歴史と今、そして未来づくり

地域の歴史を知ろうということで子どもたちと一緒に歴史かるたを作ろうということが始まろうとしています。昔百姓一揆があったんです。田谷の洞窟は農民が作ったんです。農家の人たちがみんなで20年間かけて作ってきた、そんなことが今、見えてきました。昨日もおばあちゃんが田谷の歴史を話してくれましたが、今度は「私の思いでの1曲」というテーマでやろうと思っています。カラオケも人それぞれのいろいろな思い出があるので、なぜこの歌が好きなのか、それを話してもらって、そのあとみんなで合唱するというのを11月にやるんですが、みんなからいっぱい手が挙がっています。



「田谷の洞窟」 定泉寺田谷山瑜伽洞 (横浜市栄区田谷町)

今、僕自身はここに居場所を作ろうと思っています。ところが場所がない。空き家もあって今借りようと交渉していますが、費用も結構高い。改装費用もかかるのでたいへんです。このお金をどうやって集めるか、場所をみんなでどうやって作るか、料理をしたり寝泊まりができるようにもしたいと思うのですが、みんなの知恵を借りながら地域の中でやろうと思っています。

地域というのは人材の宝庫、歴史の宝庫、文化の宝庫です。でも僕らはみんな捨ててきて しまった。これから先のことばかりを考えるのではなく、今までこんなことがあったと無く なっていったものをもう一度よびもどすということを考えています。例えば昔はどこの家 にも縁側があって、お茶を飲み、みんなで支えあっていた。そういうものを復活させようと いう動きも始まっていますが、そういうことを小さな町の中でやってみたいなと思ってい て、今日これからお三方が話していただくことを参考にしながら勉強したいと思います。 ありがとうございました。

#### 報告1 福祉たすけあい基金助成団体の実践から

# 人々の出会い、つながりをつくる場「カフェみ~な」



み~なの家(横須賀市)



報告者 特定非営利活動法人みんなの居場所よこすか 代表 木下 青子さん

## 人々が出会い、つながり、豊かな関係性を紡ぐ「場」をつくりたい

こんにちは。横須賀市の京急久里浜の駅近で「み~なの家」を運営する NPO 法人みんなの居場所よこすかの木下です。

人と人とのつながりこそが社会にとって必要なインフラだと思い、そんなつながりの場をつくりたいと「み〜なの家」を開設しました。20年以上前に生活クラブ生協の委員会活動で出会った15人ほどの仲間が、各々市民活動に携わる中で「歳をとっても自分にとっても居心地の良い居場所が欲しい」という思いが、居場所づくりの原動力になったのだと思います。

私たちの「み~なの家」の特徴は、駅から 5 分とかからない平坦な場所にあるという立地。「場」を持ちたいと長い時間をかけて居場所の検討会、準備会と活動を重ねてきた結果、ついにオーナーが現れました。家を買って、私たちが使いたいように使える場として改装してくれました。室内は全てではないですが天然素材で、床と柱は杉の無垢材、壁の漆喰はみんなで塗りました。「居場所というのは望んでいればいつかきっと良い出会いがある」と聞



いていましたが、まさに私たちにもすばらしい出会いが訪れて「み~なの家」を持つことができてちょうど1年になります。今日パネラーとして報告することになり、私たちにとってもこの1年の活動を振り返る良い機会になりました。

#### 居場所運営を支える事業

場所を持つと家賃等のランニングコストがかかってきますので、「コミュニティカフェ」、

「貸室」、「メッセージボックス」と「講座事業」、この4つを運営のための事業としてやっています。「貸室」として利用していただく際には1回ここに来ていただいて、この場所がどういった目的でつくられたかということをきちんと説明して、それを理解して利用していただくようにしています。例えばNPO法人が運営していること、合成洗剤ではなく石けんを使っていただくということなどをお話しています。定期的に横須賀市内の助産院さんが「チアーズカフェ(cheer's Café)」を開催したり、子育て支援団体が理事



会を開催したり、地域の市民団体活動に使っていただいています。地域の団体に活用していただくのはいいなと思っています。その他、企画や集まり、親子クッキング、お誕生日会、 忘年会などでの利用があり、これが私たちの事業の大きな柱になっています。

もう一つはメッセージボックスですが、福祉たすけあい基金の助成金でラックを購入し、チラシをラックに整理して棚に空きスペースができたことで実現しました。棚の半分のスペースを月1000円で貸し、売り上げの10%を手数料としていただいて、これがかなり活動の助けになっています。



また、コミュニティカフェ「カフェみ~な」を火・木・金の3日間開いているので、地域のみなさんに来ていただく入り口と思っ

ています。たくさんではないですが、目的をもってカフェにいらっしゃる方もいて、ある男性は「み~なの家」を定年退職後のご自身の居場所として定期的に通って来てくれています。 最近は小さなお子さん連れでの利用も増えています。

#### 「やりたい活動」はたとえ赤字でも大切に育む

「み~なの家」の活動の中には、元々はメンバーが他の場所で やっていた市民活動を、こちらに移行して行っているものがあ ります。そのような活動は、他事業で収入を得ながら、たとえ 赤字でも続けたいと考えています。その一つが「なかよし食



堂」。貧困支援というよりは、いろんな人とご飯を食べる場として開催しています。それと子育て中のママを応援する親子ひろば「おしゃベリッチ」。4歳までの



お子さんと子育てママが集まってワイワイ楽しく遊んだり、おしゃべりを楽しんでいます。床が杉の無垢材と畳なのでお子さんがハイハイ

しても大丈夫、主に食をテーマにメッセージを伝えています。

もう1つが「うたごえサロン」。これはちょっと年齢の高い方の参加です。毎回定期的に 目の不自由な方を連れてボランティアで一緒にできてくれる方がいて、その方たちの居場 所にもなっています。「カフェ企画」は今始まっているのは「キッズソングを歌おう」、さら に来月からの「絵本カフェ」の開催に向けて、只今準備中です。(2019年10月現在)

#### 地域のネットワークの基地として

福祉たすけあい基金の助成金を活用して5月に「み~な祭り」をにぎ やかに開催することができました。まつりを開催して本当に良かった と思うのは、たくさんの方が来て楽しく過ごしてくれたことです。み~ なの家の改装、オープンに向けてご近所にご挨拶に行ってもなかなか 来てくださらなかった地域の方も含めて、この日は60人くらいの人が 集まりました。



私たちが今こだわっているのは、自分たちだけで地域づくりをやるのではなく、横須賀で活動する様々な団体とネットワークしてやっていこうということです。そのためにいろいろな場に出て行って、地域の方と一緒に活動をすることを大事にしています。

「み~なの家」はこの場所を使いたいと思う人がいて、やりたいことがあってこそ、文字 通りみんなの居場所になると思います。私たちは1年やってきて、自分たちだけで発信する ことの限界性も感じています。ただ、地域に場をひらくと、やりたいことを持って飛び込ん

で来てくれる人がいる。「み~なの家」を通じた新しい出会いやつな ▲ がりづくりができているとの実感はあります。だから、地域の

中の主人公とつながって、そういう方のやりたいことをサポートし、それをコーディネートしていくという役割をこちら側が仕掛けていく、NPO団体として、「み~なの家」という居場所を運営しながら地域づくりに貢献していけたらと考えています。

ありがとうございました。

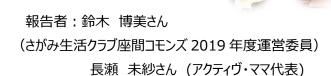
# 「み~なの家」基礎情報

運営主体	特定非営利活動法人み	かんなの居場所よこすか(2018 年 9 月設立)					
主な事業活動	なかよし食堂 親子ひろば うたごえサロン コミュニティカフェ 貸室 ボックスショップ 講座						
所在地	横須賀市久里浜1-6-8						
開設日	2018年9月1日						
開所日	コミュニティカフェ/火・木・金 うたごえサロン/第1月曜日 なかよし食堂/第3水曜日						
	親子ひろばおしゃベリッチ/8 のつく日 おうち薬膳/月 1 回 貸しスペース/不定期						
会員数・会費	正会員 28 名 賛助会員 12 名						
	月会費 100 円						
スタッフ(有償)数・	スタッフ(有償)0人						
ボランティア(無償)数	ボランティア (無償)月平均 15 人						
地域連携団体	市民活動サポートセンター、横須賀みうら子育ち応援ネットワーク、						
横須賀三浦子ども食堂・地域食堂ネットワーク、生活クラブ運動グループ、地域活動グループ等					プ等		
地域の特徴	横須賀市は年々高齢化	とが進み人口流出も多い	街です。独居の高	- 高齢者やひとり親での子育	育てなど不安を		
抱えて生活している方々も少なくありません。その中で久里浜は子どもが多く、人口も増えている					ハる地域です。		
	横浜マリノスや病院,警察署などの施設移転が決まり横須賀の中では活気ある街ですが、み~なの家の周						
りは高齢化が進み、お子さんは少ないように感じます。しかし行政や社協などの施設やショッピン					ピングモール、		
	商店街も身近にあり、地	域連携をしながら居場所	f事業運営していく	ためにふさわしい地域と打	足えました。		
開設の動機・目的	開設の動機・目的 人が生き生きと暮らしていくためには人と人とのつながりが必要で、かけがえのない資本。ささやかっ						
	び合える場、自分の話をちゃんと聞いてもらえる場、人々が持っている知識や生活技術を楽しみなが						
しあう場があれば、そこを拠点として人々が出会い、つながり、何か出来るかもしれない、一					≅踏み出してみ		
ようという新たな発想や主体が生まれます。これまでも私たちはそれぞれが地域活動				ぞれが地域活動を行って	きました。今後		
	さらに活動を深め、社会	に向けてオープンに活動していくために自前の拠点を持ちたいと考えました。 地域の					
	様々な活動団体や個人	々な活動団体や個人と共に、大勢の参加と知恵を出し合い、未来に向かってこのまちが少しでも住みや					
	すくなるように実践してい	るように実践していきます。 (設立趣意書より)					
初期投資·資金調達		収入(2019 年度予算)		支出(2019年)	度予算)		
■出資金	200,000	■事業収入(上位3	事業)	■人件費(交通費)	190,000		
■寄付金 2018 年度	335,895	・コミュニティカフェ	309,000	■交通費	339,000		
2019 年度	166,278	•講座	205,950	■家賃	54,000		
■助成金		・貸室	122,400	■通信費	77,600		
•大和証券福祉財団	300,000	■会費収入	37,000	■水道光熱費	140,000		
・福祉たすけあい基金スター		■助成金・補助金	699,124	■材料費	259,100		
(2019) 399,124		■寄付金	135,153	■諸謝金	82,850		
■備品はおおぜいの方からの	)寄付			■広報費	80,000		
				■備品·消耗品費	97,000		
				■法人税	29,100		
				■その他	444,519		

# 生協・子育て活動団体・家主の3者による地域の居場所づくり

### ひだまりの家(座間市)





## 2 つの活動団体と家主の 3 者によるプロジェクトが発進

座間市のひだまりの家プロジェクトの鈴木と申します。さがみ生活クラブ生協座間コモンズ(注)の運営委員長をしています。よろしくお願いいたします。同じく長瀬と申します。私たちは2つの団体でひだまりの家を借りていまして、その1つの団体、アクティヴ・ママという子育て応援団体の代表をしています。よろしくお願いいたします。

「ひだまりの家プロジェクト」は2018年の6月にスタートして1年ちょっと経ったところです。私たち利用団体と、場所を提供してくださった大家さんと3者でプロジェクトをつくって運営しています。地域の課題解決の場である「ひだまりの家」の維持管理を行い、地域の団体にスペースを貸し、居場所づくりを推進しています。

こちらの家を貸していただく ことになったきっかけは、さが み生活クラブの組合員活動で居 場所づくりに取り組もうとした ときに、場所がなかなか見つか らず、組合員に空き家の情報を 呼び掛けたことでした。すると、 1 名の組合員から、「ご主人が会 計事務所として使っていた場所



が空いている」とのお話があり、早速貸していただくことになりました。大家さんに伺った ところ、この地域は高齢者が多く、ひとり親の子どもさんの学習支援も必要だということで、 そういった地域の課題解決の場として、この空き家を活用することになりました。

ちょうど同じ時期に、座間の子育て応援団体「アクティヴ・ママ」でも子育てサロンをする拠点が欲しいと場所探しをしていました。私もアクティヴ・ママのボランティアスタッフだったので、この場所を一緒に使わないかと呼びかけ、2団体の共同の活動拠点として借り

ることにしました。2018年4月に大家さんと3者で覚書を交わし、「ひだまりの家プロジェクト」立ち上げの準備が始まりました。とても日当たりが良い建物だったので、新たな活動拠点を「ひだまりの家」と名付けました。それまで7年くらい空き家になっていたので、まずは埃やクモの巣を取りはらい、大掃除から始めました。床拭きをして、じゅうたんを張り替え、修繕をして、6月にオープンしました。

#### 生活クラブ組合員の活動拠点として

地域のみなさんに来ていただけるような居場所として毎月第1火曜日に生活クラブの座間 コモンズの企画として「さんさんカフェ」を開いています。太陽の sun と 3 世代の 3 を掛け て、3 世代の方が集えるようにと「さんさんカフェ」と名付けました。地域の組合員からス

タッフとして参加してくれる人を募り、その方たちを中心にお料理づくりや地域の1軒1軒へチラシ撒きの協力をしてもらいました。地域の方々に来ていただき、最高齢の方が102歳です。毎回楽しみにして来てくださるので、これからも続けていきたいと思っています。

日本では今、健康で長生きというのがテーマとなっているので、そのほかにも「健康づくり講座」を開催しました。



生活クラブ組合員の活動拠点として、クリスマス・正月用品試食会や、次年度方針を議論し 決定するコモンズ大会で活用したり、地域の防災活動に関心のあるメンバーが集って復興・ 防災カフェを開催するなどして活用しています。

#### 子育て応援活動を地域に広げる

「アクティヴ・ママ」の紹介をさせていただきます。2000年から座間市で子育て応援をしている団体です。10以上の活動がありますが、その中で3,4つひだまりの家を使って活動しています。その1つが「子育てサロンぽっけ」毎週月曜日、水曜日に開催し、子育て中のファミリー、子育てを応援したい人など、誰でも参加できます。お母さんが講師になっ

てみんなで絵の具をつけて絵を描くというアートワークショップを やったり、子どもたちが主体となって折り紙などで作った作品を売 るという「子ども市」というのをやっています。

また、毎月第 2、第 4 金曜日には子ども食堂を開いています。「子 どもたちが調理をする」、「異年齢で交流をする」、「自分の親以外の大人と交 流する」という子どもたちの 3 つの体験をモットーに開催しています。昨日 は座間市でレストランをやっていた元店長さんがお友達のシェフとともに 男性 2 人が料理をふるまってくれて、とても豪華な食事になりました。普段 はお母さんと子どもたちで作って、2歳の子も包丁をもって切っています。

そしてもう1つの活動が学習支援です。座間市の協働事業として月1回第1月曜日に、それ以外の週には座間市の社会福祉協議会との事業として毎週1回、市と社協からそれぞれ補助金をいただいて開催しています。近年座間市では外国籍の方が増えているので、現在は外国籍の子どもの学習支援が中心となっています。座間キャンプがあり、もともとアメリカ人の方も多い土地柄ですが、今は中国人、ベトナム人、イスラム系の方もすごく多くなりました。座間市にはこれまでも大人向けの日本語教室はありましたが、子どものための教室がなかったので私たちで作ろうということで、今年の4月から始めました。

#### 地域の課題解決の場として

ひだまりの家は1階のフロアが34畳ほどあり、小さなお子さんも安心して過ごせる広々としたスペースです。一角に小さくなった子ども服を50円とか100円でお譲りする「お下がりコーナー」を設けたり、おもちゃなどもそろえています。福祉たすけあい基金の助成金でエアコンをつけました。昨年の夏は猛暑で赤ちゃんが途中で帰ってしまい申



し訳ないと思っていましたが、今年は快適に過ごすことができて本当に良かったと思っています。庭もあるので餅つきをしたり、夏には子どもたちはプールを出して遊びます。駐車場も10台分貸していただいていて、助かっています。レンタルルームとしても地域の方々に使っていただきたいと思っていて、サロンに来るパパやママたちから幼稚園の親睦会をここでやりたいといいうお話をいただいて利用していただいています。

6月に1周年を迎え、生活クラブ生協、アクティヴ・ママの両団体が共同でイベントを行いました。9月末に地区社協の主催で地域で居場所づくりをしている10団体が集まり、それぞれの活動の共有と情報交換と交流の場があり、私たちも参加させていただきました。みなさんいろいろな居場所づくりをしていてとても勉強になる場でした。これからもひだまりの家が地域に浸透するように、地域の課題に目を向けながら活動していきたいと思っています。ありがとうございました。

注:コモンズは生活クラブ生活協同組合の行政区単位の組合員の自主組織

# 「ひだまりの家」基礎情報

運営主体	ひだまりの家プロジェクト(2018年6月設立)				
主な事業活動	カフェ・子育てサロン・子ども食堂・学習支援				
所在地	座間市入谷1-3232-1				
開設日	2018年6月1日				
開所日	カフェ/第 1 火曜日 子育てサロン/毎週月・水曜日 子ども食堂/第 2・4 金曜日				
	学習支援/毎週月曜日 貸しスペース/不定期				
会員数·会費	座間コモンズ 5,000 円/月 アクティヴ・ママ/12,000 円/月				
スタッフ(有償)数・	スタッフ(有償)0 人				
ボランティア(無償)数	ボランティア (無償)平均 2~3 人/回				
地域連携団体	自治会 社会福祉協議会				
1151-15-01-116					
地域の特徴	高齢者の孤立化が進んでいる。また、ひとり親家族、外国籍の親子に学習支援の必要性ある地域。 				
開設の動機・目的	地域の憩いの場にしたいと思い開設。アクティヴ・ママも常設のサロンができる場所を探していたので共同で				
	借りることになりました。子育て世代の孤立化も課題となり、どの世代でも利用できる場所となるよういろいる			場所となるよういろいろ	
	な企画を行います。				
初期投資・資金調達	収入(2019 年度予算)		支出(2019年度予算)		
掃除、片付け、	■会費収入		■光熱費	140,000	
一部床の張り替え	・座間コモンズ	60,000	■火災保険料	60,000	
	・アクティヴ・ママ	144,000			
	■助成金・補助金				
	・福祉たすけあい基金スタート助成	395,240			
	•座間市相互提案型共同事業	500,000			
	•座間市社会福祉協議会事業	36,000			

# 誰もがほっとできる多世代交流スペース



フリースペース ら・ぱれっと (茅ヶ崎市)



報告者 ら・ぱれっと 代表 重田 扶美子さん

### きつかけは保育舎の環境保全

「フリースペースら・ぱれっと」の代表をしております重田扶美子です。今回のフォーラムに向けて、前からつくりたいと思っていた三つ折りパンフレットをつくることができました。これをご覧になりながら活動を紹介させていただきたいと思います。



10月に開設しました。茅ヶ崎駅北口から商店街を通り歩いて 15分の所にあります。バス停も近く交通の便の良い場所です。小さな戸建ての住宅で、6畳の和室、4畳半の洋間、台所、風呂場と南に面した日当たりのよい庭があり、野菜なども良く育ちます。国道1号線から50Mも離れていませんが、車の音も聞こえず、近くに小・中学校があり住みやすい

「フリースペースら・ぱれっと」は2015年

場所です。典型的な昭和の時代の借家です。

みたいなそんな思いでした。

私たちがこの場所で「ら・ぱれっと」を開設するきっかけになったのが、立地もありますが、もう一つの思いがありました。現在の「ら・ぱれっと」の仲間は20年前にある保育舎の立ち上げに関わった仲間でした。この保育舎に隣接する古民家が空家になり、のちのち

アパートが建つかもしれないとの情報があり、保育舎の環境を守りたいということで仲間とこれを借りあげました。 私はこの保育舎を「子どもの天国」と紹介しています。保育舎を最初に始めたメンバーは一緒に子どもを通わせていた幼稚園のお母さんたちです。子どもが小学校に通い出した頃、のびのびと1日中夢中に遊べる園の大切さを感じ、「おひさま保育舎」を立ち上げました。そのような保育舎なので思い入れが強く、今思えば「正義の味方ババマン」



隣接する「おひさま保育舎」

このようにして借り上げたこの場所をみんなに知ってもらうため、キリン福祉財団より

『キリン・シルバー「力」応援事業』の助成を受ける事が出来たので、地域の「家庭科手しごと教室」を毎月1回企画しました。季節に合わせ梅干し作り、栗の渋皮煮、古布を使ったリメイク品作り、災害時に役立つ燻製作り等、多種多様な講習会を開催しました。実際毎月企画するのはたいへんでしたが、1年間いろいろな活動をする中で、このスペースで何が出来るか、何がしたいかを話し合う良い時間が持てたと思っています。そして、今まで生きてきた中で感じてきた様々な思いをベースに活動しようと方向性が決まりました。

## 頑張っているママたちにリラックスの時間を

その1つの事業が「お母さんと赤ちゃんカフェ」です。お母さんと子どもに寄り添い、子育ての経験者としてアドバイス、一緒に考える仲間作りのスペースとして月1回開催しています。みんな明るいお母さんたちで、集まるとワイワイ、ガヤガヤとても楽しそう、そんな中でちょっとした不安や相談ができる赤ちゃんカフェになってきました。500円で提供している



ランチは、食の大切さを伝えたいとの思いで、前日に収穫した自家農園の野菜、安心して食べられる食材を使って料理しています。座卓なので子どもたちと目線が合うのでお母さんも安心して食事ができるようです。ふだんは食事をつくる時間がなくてインスタントや冷凍品を活用することもあると思いますが、新鮮なものを調理するとこんなおいしいものが食べられるんだということを感じてもらえればと作っています。「何か食べたいものはあり



ますか?」とお母さんたちに聞くと、「なかなか家では油が使えないので、てんぷらが食べたい」という要望があったりして、次の赤ちゃんカフェは野菜いっぱいのかき揚げとうどんにしようかなと、その時その時に合わせたメニューを考えています。ちゃんと食べる事の大切さ、料理を作ることの大切さ。子どもが成長していく中で、食事は大切な時間だと思っています。

## おしゃべりしながら楽しく手しごと

2つ目の事業はミシンカフェ、月に2回、朝10時から4時まで開催しています。助成金で厚手の布から皮まで縫えるミシンを購入することができました。その他にロックミシン2台、足踏みミシン、家庭用ミシン、プロ用のミシンは寄付で集まりました。

チラシを見たり、友達に誘われて、50 代~80 代の元気な方たちがお弁当持参で集まり、 毎回好きな物を作っています。着物をほどいてコートを縫ったり、現代風もんぺ、バックや

小物入れなど作品は様々です。素敵な洋服を 着ていると脱がされて型紙を取られます。お 互い教え合いながら、「手しごとをしながら話 をする事がボケ予防」と言って笑いが絶える ことがない1日を過ごしています。昨年はお おぜいの人が集まって作品展も開催すること が出来ました。



## 安心して多世代が集える交流スペースをめざして

最終目標は誰でも来ていいよと言える居場所づくりです。ゆっくりと人との出会いの中で活動していきたいと思っています。このように夢はあるのですが、借家であり月々の家賃を稼ぎ出さなければ継続は難しくなります。そのため市民祭りに参加して芋煮、野菜の販売、フリーマーケットなど、朝からたいへんですが、資金を稼ぐために頑張ってやっています。また、独自事業として藍の普及活動「ちがさき藍プロジェクト」を立ち上げました。藍は古来より多くの効果を持つ薬草として人々の暮らし



を支えてきました。防虫、防臭効果、抗菌作用、紫外線防止効果があります。市民まつりで 藍の種、苗など、藍を使ったグッズを販売するなど広げていきたいと思っています。

いろいろな人達が寄り添い、混ざり合えればとの思いで、絵具の色を合わせるパレットから 「フリースペースら・ぱれっと」と名前を付けました。どのような色が生まれるか楽しみです。



# 「フリースペース ら・ぱれっと」基礎情報

運営主体	ら・ぱれっと (2015年 10月設立)					
主な事業活動	居場所事業					
所在地	茅ケ崎市十間坂3-10-36					
開設日	2015年10	月				
開所日	お母さんと赤ちゃんカフェ/第3木曜日 ミシンカフェ/第1・3金曜日 貸しスペース/不定期					
会員数·会費	5名 年会費 2,000 円					
スタッフ(有償)数・	スタッフ(有償)0人					
ボランティア(無償)数	ボランティア (無償)平均8名					
地域連携団体	NPO 法人 WE 21 ジャパンちがさき NPO 法人ワーカーズ・コレクティブぷらねっと					
	NPO 法人ワーコレたんぽぽひろば 茅ケ崎市民活動サポートセンター					
地域の特徴	茅ヶ崎市も毎	手年高齢化率が1	し%ずつ増加しており一人	暮らしの方や高	齢夫婦の方が多くな	っている。子離
	れ・加齢など	で孤独になりがちた	5なシニア女性も多くなっている。年金生活への不安・人と話すことなく終わってし			
	まう 1 日、そんな生活の中で、行くところがある、会う人がいる、やることがある場から新しい価値が生				値が生まれ、自	
	立した生活の質が向上するかもしれない。この地域は茅ヶ崎駅にも近い地区であるため、公共の施記				の施設が駅周	
	辺に集まってしまい、親子が集える居場所が少ない。赤ちゃんを抱えて、それまでとは環境が変化					変化し、不安や
	孤独感を感し	び、心身共に疲れ <sup>-</sup>	ているお母さんに、ゆったりと	過ごせてもらえる	る場所を提供できる。	
開設の動機・目的	茅ヶ崎市内で 10 数年にわたり、それぞれ、資源のリユース・リサイクルを推進し女性の生活の向上と自立のた					句上と自立のた
	めの活動や、子育ち支援外国につながる子どもたちの支援を行ってきたスタッフが、借家を借りて新たな団体					つて新たな団体
	を立ち上げ、地域に安心して多世代が集えるフリースペを作りたいとの思いで活動を開始しました。誰でも					した。誰でも来
	ていいよと言える居場所づくりを目指しています、ゆっくりと人との出会いの中で活動したいと思っていま				っています。絵	
	具の色を合わせる、パレットから 名付けました。いろいろな人達が寄り添い、混ざり合えればとの思いです。					の思いです。
初期投資·資金調達		収入(2019 年度予算)		支出(2019 年度予算)		
■初期投資		140,700	■事業収入(上位3事	業)	■旅費·交通費	5,000
■資金調達			・ミシンカフェ	60,000	■通信運搬費	3,000
•出資金		315,000	・お母さんと赤ちゃんカス	7ı 48,000	■広報費	30,000
・借入金		191,000	・貸しスペース	15,000	■物品購入費	90,000
・キリン財団(2016) 300,		300,000	■会費収入	20,000	■賃借料	426,000
・茅ケ崎市げんき基金(2016) 77,579		■助成金・補助金	380,000	■諸謝金	30,000	
・茅ケ崎市社協(2016~2019) 120,000		■バザーなど	80,000	■印刷製本費	16,000	
・福祉たすけあい基金スタート助成				■消耗品費	3,000	
(2018) 360,000						
・福祉たすけあい基金ス	・福祉たすけあい基金スタート助成					
(2019)		350,000				

# 第2部 パネルディスカッションより

#### -共に生きる場の再創造をめざして-

#### **<パネリスト>**

- 木下 青子さん (NPO 法人みんなの居場所よこすか)
- 重田 扶美子さん (フリースペースら・ぱれっと)
- 鈴木 博美さん(ひだまりの家プロジェクト)
- 長瀬 未紗さん(ひだまりの家プロジェクト)

#### <コメンテーター>

■ 加藤 彰彦さん(沖縄大学名誉教授)



#### 加藤さんから3団体へのメッセージ

加藤:みなさんの報告で、地域の方が場所を使ってくださいという申し出があったり、居場所として使っていくためにみんなで改造をしたり、というお話がありました。居場所をつくることは夢だし、可能性はあるけれど、始めてみると「場をどのように維持していくか」、「どうやってみんなに来てもらうか」、「そこで何をやろうか」など、いろいろ考えなければいけない課題があるなと感じました。その難しさとみなさんの努力がわかりました。

#### 私たちの居場所自慢

木下:無垢材と自分たちで塗った漆喰の壁の空間評価。来てくださる方が居心地が良いと思ってくれて、 それが貸室の利用にもつながっていると思います。

地域のコミュニティカフェは個人でやっている方が多いのですが、私たちは NPO で運営しているので、みんなで検討してすすめています。個人に比べて対応には多少時間がかかる面もありますが、それが私たちの良いところだと思っています。

重田: 古い建物なので、利用する方から「実家に帰ってきたみたい」と言われます。 他におしゃれな建物 はたくさんあるけれど、ほっとしてもらえるようです。課題は、フリースペースとしてまだまだ活用されて いないこと。地域の方に「こんな使い方ができます」という提案力を持たないといけないなと思います。

長瀬:20 年間地域で子育て応援活動しているので、居場所を開けば誰かが来てくれるという実感がありました。集まっている方の中からいろんなアイディアが出て、活動が広がっているのが良いところだと思います。ひだまりの家は高齢者の多い古い街の中にあるので、3 世代の交流をめざしていたのですが、高齢者がなかなか来てくれないのが課題でした。「さんさんカフェ」を毎月1回開いて近くでおしゃべりしていたおばあちゃんが来てくれて、いろんな方が来てくれる場所になってきて可能性が見えてきたなと思っています。

#### 居場所で生まれる多世代の人のつながり

木下:居場所を運営する中で、たまたま高齢の方と、赤ちゃん連れの方がいらっしゃって、そこで多世代の交流が生まれてホッとするような場面があります。普段の生活の中ではなかなか出会えない人同士が、「み~なの家」で出会い、新たな交流が生まれると、居場所を作ってほんとうに良かったなと思います。多世代の人と人とがつながる小さなきっかけが「み~なの家」で



生まれ、日常の中でこれからもどんどん積み重なっていくと素敵だなと思います。

長瀬:私たちは子育ての活動が多かったのですが、地域の居場所交流会に参加してみると、高齢の方が集まる場が地域にたくさんあるということを知りました。その中で地域の元自治会長さんと知り合って、場を知っていただく機会ができて良かったです。また新たな広がりができるのではないかと思っています。

#### いろんな人たちが登場してくると地域が元気になってくる

加藤: どういう方々が地域に暮らしているのかを、もう一度考えてみることが大事ではないかと思います。 子ども、高齢者、お母さん、地域でお店をやっている人、障がいのある方、外国人の方たち、この ような人たちが地域の主人公になると思います。この人たちが安心して集まれるような場所が地域 にあるということが大事だと思います。

沖縄のチャンプルー (混ぜ合わせる) という郷土料理のように、いろんな人が集まり交流することで良い味が出できます。安心してほっとできる場所、みんなが交流する場所、そういう要素が 3 つの団体にはそろっている感じがして、行ってみたいなと思いました。うちの老人クラブを連れていきます。

#### 地域の子どもたちのための居場所づくり(会場より)

戸田:鎌倉デポーの2階の集会室で週1回、子どもひろば「みらい」を開設し、1年半活動を続けてきました。初めて来てくれる子どももいれば、大きくなるにつれ卒業していく子もいます。一人でも来てくれる限りは続けたいと思っています。この子どもたちの居場所を地域に知らせ、新しい企画も展開しながら、活動を続けていくことが大事だと思っています。

また、一緒にやっているスタッフとの出会いが、私にとっては大きな喜びでした。子どもひろば「みらい」 は私にとっても大切な場です。子どもたちにとっても、子どもひろば「みらい」がそのような出会いの場であってほしいと思っています。

廣瀬:コミュニティカフェ 6 丁目クラブの廣瀬です。

鎌倉の今泉台という2000世帯、5000人が住む住宅地で月曜日から土曜日、カフェとお弁当の配食をやっています。毎週金曜日、カフェの終わった後の時間を、放課後の子どもたちの居場所として開放しています。20人から30人の子どもたちが口コミで集まって来て、騒いで、けんかして、遊んで帰っていきます。子ども同士の交流の場なので、これまでは私たち大人は外から見守るだけ、子ども同士で解決すれば良いと思ってやってきました。今日の加藤先生のお話で一人ひとりに寄り添って、子どもたちの中に入りこんでいくということをこれからのテーマにしてみたいと思います。

#### 地域づくり 居場所からの発信

木下: 久里浜に拠点を持っていますが、一番の課題は徒歩圏内にスッタフメンバーがいないこと。すぐ走ってこられるような人を仲間にしたいと思います。使いたい人があっての居場所なので、地域で何かやりたいと思っている人を主人公にして、私たちがその活動をサポートしていくというように、方向性を変えていくのが良いのかなと思います。

重田:今のメンバーだけでやっていると、みんなだんだん歳をとるし、アイディアも枯渇します。次に渡していける人たちをつくることが大事だと思っています。

「ら・ぱれっと」は いつでも誰でも来ても良いと言える場所、そこに誰かがいてほっとできる場所をめ ざしていて、そんな場所は開いている自分たちにとっても一番安心できる場所だと思っています。誰 もが安心できる場所を地域にひらく、そんな思いで続けていきたいと思っています。

鈴木:地域にいる方たちが望んでいることを、その方たちと一緒にやっていくのが大事だと改めて感じました。 住んでいる方が活躍できる場、地域に根差した場にしていきたいと思います。

長瀬:子どもたちがのびのび元気に育っていく地域社会をつくりたい、そのためにはお母さんが元気にならないとだめだと思っています。加藤先生のお話で、「人は一人では生きていけない、仲間が必要だ」

というお話がありましたが、家の中で子どもと二人きりで過ごしているというお母さんたちがすごく多い。お父さんは忙しくて「今日は誰とも話さなかった」「今週はずっと子どもと二人きりで疲れた」と子ども食堂に来る人がいます。そういったお母さんたちが元気になって帰っていく居場所でありたいなと思っています。それが子どもたちにもつながっていくと思います。そして地域のシニアの方やいろんな方が入っていただけたら嬉しいなと思って活動しているところです。



#### 人々が集う場づくりこそが民主主義の再構築

加藤:みなさんからいいお話をたくさん伺えたと思っています。

沖縄の離島ではどんどん人がいなくなって無人島になっていくところが多いです。一つのまちや島が活性化していくために何が必要か。沖縄では、「子どもたちとお母さんが元気なところは必ず発展する」と言われています。ここにお父さんが含まれてないんですが、男性は、子どもたちとお母さんたちの元気な姿を見て癒されながら協力していく、つまり子どもと女性たちを応援していく気持ちになったときに元気になると言われています。まず、子どもたちが元気になっていく、そのことが大事と思います。それともう1つ、今日お話があったように、居場所づくりというのは自分自身にとっても安心できる場をつくっていくということが大事だと思います。

ひとが集まって話をするというのは民主主義の基本です。今の日本の中で、民主主義を地域や 日常になかなか根付いていかないのは、みんなが孤立し分断しているからです。みんなが集まって、 「こんなことをやろうじゃないか」、「あの人どうなったかな? みんなで応援に行こうよ」というのが民主 主義ですよね。ですから今、みなさんのやっていらっしゃることは、実は民主主義の根っこを日常生 活の中に創りあげることだと思います。居場所づくりというのはすごく可能性があって、日本を根底 から変えていく大事なお仕事だと思うのです。

今日はありがとうございました。

#### フォーラム概要

開催日 2019年10月26日(土) 場 所 オルタナティブ生活館 スペースオルタ

- 主 催 公益財団法人かながわ生き活き市民基金・フォーラム実行チーム
  - フォーラム実行チームメンバー:木下青子・鈴木博美・長瀬未紗・重田扶美子
- 後 援 生活クラブ生活協同組合、福祉クラブ生活協同組合、神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会、 NPO 法人ワーカーズ・コレクティブ協会、認定 NPO 法人 WE 2 1 ジャパン、神奈川県生活協同 組合連合会、公益社団法人神奈川県地方自治研究センター、一般財団法人神奈川県地域 労働文化事業団
- 協 賛 神奈川県労働者福祉協議会、かながわ教職員組合連合、公益財団法人横浜 Y M C A 、 一般社団法人ソーシャルコーディネートかながわ、早川運輸株式会社、JA 神奈川県中央会

発行日 2020年3月 発行部数:1000部

編集協力 鈴木健一(公益財団法人かながわ生き活き市民基金理事)

# 市民活動を応援しよう

公益財団法人かながわ生き活き市民の活動は 意思ある市民からの寄付により支えられています

- ★かながわ生き活き市民基金では「助成事業」を基盤として「研修・セミナー事業」「相談・助言事業」「広報事業」の4事業に取り組み、市民活動を応援しています。
- ★福祉たすけあい基金の助成事業は、毎月 100 円の寄付を原資に、毎年2回地域の福祉たすけあいの市民活動に助成を行っています。 2013年の設立から2020年3月までに145団体に約4,700万円を助成しました。
- ★研修・セミナー事業では、社会で起きている課題をフォーラムや研究 会の開催を通して可視化し、共有し、市民活動への問題提起を行って います。
- ★公益財団法人かながわ生き活き市民基金への寄付によるご支援をお願いいたします。公益財団へのご寄付は所得税、市民・県民税、企業の特別損益算入が適用されるなど、税制優遇の対象となります。

発行:公益財団法人 かながわ生き活き市民基金

住所: 〒222-0033 横浜市港北区新横浜 2-2-15 パレアナビル 6 階

Tel: 045-620-9044 FAX: 045-620-9045

Mail: info@lively-citizens-fund.org

URL : http://www.lively-citizens-fund.org/

